



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.180  
2018.9.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第23回 ● 「拳形」突起集成の目的と俯瞰

第27図(い)(ろ)(は)は全形を窺える「器物形状の一致」に形態学としての意義があり、しかもこの3例の突起は、第2図の西ヶ原貝塚の「把手の形状」において「横霊芝形」と分類され、更に3種に細分された仲間の一部である。本連載第14回でも少しく触れたように、今回の分類では「横霊芝形」から更に特定し、「拳形」と改称する。西ヶ原貝塚の分類は西ヶ原貝塚としての特徴を導出する目的であり、今回は「器物形状の一致」の例に注目し、あくまで所与の目的が「拳形」に限定される突起の形態分析である。

坪井正五郎にとり、特定の遺蹟内形態分類から目的志向の形態分析への高度化は、本連載第19回で述べたように「コロボックル風俗考」での無言の把手配置が契機となり、更に目的を明確にし、形態を限定した上で分析を推し進める役割が「異地方発見の類似土器」の意義である。

これまでの視点である「類似の形態連携論」からは「器物形状の一致」を「此奇妙な形の突起は、如何に考へても、同一人の細工か然らざれば模擬としか思はれません。彼様な形が何に必要とも思はれず、又彼様な形が暗合する譯も無からうと思ひます。」(ゴチック体は引用者、以下同様)と指摘する。では、陸平貝塚(い)と椎塚貝塚(ろ)、そして岩代田子沼(は)の3例間に見出される関係は、「拳形」突起と分類される分布の中心と如何なる関係を示すのであろうか。

そこで全形は窺えなくとも「類似の最も著しい」とされる突起部分のみも資料に加え、分布の中心を絞り込むという目的が生じ、

「今私の手元に九個」あり、「何れも全然同一では無い」ことから「九個別々の土器に付いて居たもの」との個体識別を経た上で、「然れば拳形突起の付いた土器は十二有る」ことから、「十二の突起を土器の外側から見た形」の第28図と「是等を左側から見た形」(次回の第29図参照)の夫々両者を同じ番号で対する1頁台の2図版を掲げ、分析が開始する。

第28図の12個の突起に観る配置・配列の吟味は次回に譲るとして、先ずは全体を観る俯瞰分析である。

「何れも少し宛の相違は表して居りますが、総体の形状については「相互に縁故を有して居る事は明かであり、恐らく誰が見ても是等は一つのものの変形である」との展望を示す。即ち、「少し宛の相違」が「一つのものの変形」として新たに分析されることになるが、この配置・配列そのものが俯瞰の為にあること事は言を俟たない。

次に「一つのものの変形」と断じられた「拳形」突起はどのような分布を示すであろうか。

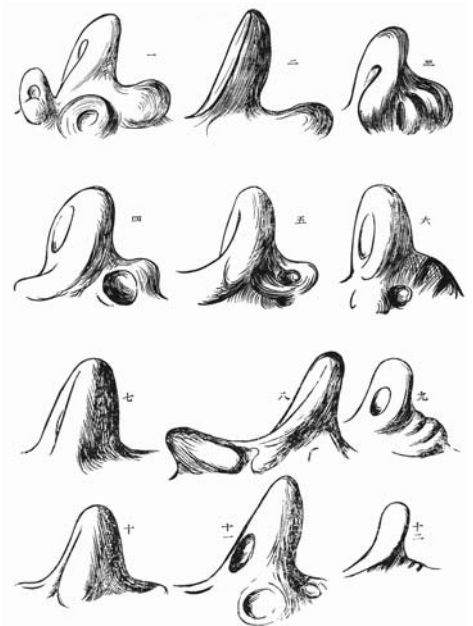
東京都に大森貝塚6個(二・四・五・六・八・十)、千鳥久保貝塚2個(七・十一)、西ヶ原貝塚1個(一)の計9個の分布、茨城県に椎塚貝塚1個(三)、陸平貝塚1個(九)の計2個の分布、それに福島県に田子沼1個(十二)となり、大森貝塚と西ヶ原貝塚・椎塚貝塚・陸平貝塚に見られる多寡は発掘調査を経た資料分析だけに少なくとも偶然ではなく、傾向として信頼できる。

坪井正五郎は「類似の形態連携論」に分布密度を加えてこの現象を理解し、「此類

の突起の分布は南の方大森から始まって、北の方猪苗代に至って居る。一つ本源から出たとか見えぬ類似土器が斯く分布して居るのは、同一の細工人が此所彼所に往来したか、然らざれば一地方の製作品を他地方へ運搬した結果と見て宜い」と分析し、その為には「石器時代人民は大森と猪苗代との間に交通の途を持って居た」と考察する。

但し、陸平貝塚(九)と田子沼(十二)の2個については「他と稍製法を異にして居りますから一地方の物を他地方で学んだのか」との明確な注意も促しているが、ここでは記憶に留め、深入りは避ける。

今回は愈々本邦初の「類似度順序形態学」の創出と出会うことになる。



▲第28図  
「異地方発見の類似土器」所収の「拳形」突起集成

\*巻頭連載は隔月です。次回は中里さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 「拳形」突起集成の目的と俯瞰(第23回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第16回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスバレット・サイト(第173回) 中里伸明 …3  
■考古学者の書棚 「入門パブリック・アーケオロジー」 渡瀬健太 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第16回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

4. 石棺の石材(7) 補遺 亀山石の石宝殿<sup>いしほうでん</sup>

あまりにも石棺石材の話が長くなった。後期古墳期の石棺については、私どもの古い著述や報告、また近年の多くの方々の成果に譲りたい。ただ私どもの石棺石材研究の中では、重要な意味を持った亀山石産地に今も残る「石宝殿」にだけは、別途触れておきたい。考古学的な実体があり、関係する伝承や文献があっても、長い歴史の中で、その実態に対する人間の意識や知識が、如何に変化するかを実験したような対象だからである。私たち二人の考古学遍歴の中でも、忘れられないものだと思っている。この内容は、古い共著『日本史の謎・石宝殿』(六興出版1978.10)と、多少改訂した『石宝殿・古代史の謎を解く』(神戸新聞出版1996・3)で述べた事だが、今では忘却の彼方のものであろうから、省略だけでも記したい。

「石宝殿」は現在の兵庫県高砂市の生石(おおしこ)神社のご神体で、祭神は大国主命・少彦名命、神社所在地は亀山の石切り場の只中。北に山陽本線、南に山陽新幹線の走る地点で、近接の本線駅名は「ほうでん」である。今では快速も止まらない。だがこうした駅名であることは、山陽本線が付設された頃には、この辺りでは最も著名な名所旧跡だった筈である。かつて石宝殿は宮城県塩釜神社の鉄製大塩釜・宮崎県高千穂の銅製天の逆鉾と共に日本三奇の一つとされていたのだ。江戸時代の著名な周辺の旅行記の多くには、その石宝殿の姿風景の写生画が入っている。

繰り返し述べてきたこの亀山石が、古墳時代大王墓の石棺となった点に関し、神功皇后と石棺作連大来によって発見されたとする逸話が、『播磨国風土記』の印南郡大国里に記載されている事を知る人は、今の考古学関係者の中には多いかもしれない。だがそれに続いて、風土記に書かれた次の物体に対する意識の変化にどれほどの興味をもっているだろうか。

『播磨風土記』は少なくとも8世紀の前四半世紀までには完成していたとされる。その印南郡中の先の石棺材発見記述に続き、次のような内容の文面がある。「..作石あり..形は屋のよう..長二丈・広さ一・五丈・高さも同じ..呼名は大石。伝えでは聖徳王の御世、弓削の大連が作った石」これは所在位置が現在の兵庫県高砂市の亀山一帯のことで、大きさ・形態ともが現在その地の生石神社ご神体石の「石宝殿」と、一致すると見て間違いないものである。8世紀の早い時期には既に存在し、しかもこの石造品は、そのときに「伝承」として聖徳太子の世に、弓削大連(物部守屋)の作という明記されていたのだ。

ところで『万葉集』巻一(355)には、生石村主真人の作として「おおなむち(大国主命) すくなひこな(少彦名命)の いましけん しずのいわやは いくよへむらん」がある。これでは具体的に「しずのいわや」が亀山にあることも石宝殿という証明もない。ただ現在この神社の祭神は「おおなむち」と「すくなひこな」であるが、他には具体的に現状に結びつくものは無い。しかもこの神社は平安初期の延喜式内社にはまだ入っていない。『万葉集』の歌の作者は、奈良時代天平10(738)年頃美濃国の一役人だったようだ。作者の姓名の「生石村主」は当時、出雲・但馬・伊賀などでも知られている。この神社に関わる者だ

と確定できないことは、古代の氏姓を知る人であれば、周知のことだろう。ただ養和元(1181)年の『播磨国内神明帳』には「生石大神」の名がある。『式内社』から250年余の後のことである。

石宝殿そのものに関しては『峯相記』の貞和4(北朝年号1348)年10月18日に記載がある。大意では「..生石子と高御蔵は陰陽二神で夫婦、天より下り石で社を造るが、夜が明け、押し起こすことが出来ず帰った。..社の大きいこと、凡夫にはできぬ事..」とある。中世ではこの製作者は男女の夫婦神。この本には、この地に石舟のあったことをも記し、この石舟に美女を乗せて日向大明神が来たともある。

江戸時代中期の『播磨鑑』に石宝殿の履歴略記をのせているが、その大意は「神代の昔に大国主命と少彦名命が岩舟に乗ってこの山に来た。二神が一夜で社を岩から刳抜いて造り、鎮座した」と成っている。この中には、先の万葉集の歌を引用している。

中世には地元地名の夫婦神が、江戸時代になると、『万葉集』を知ることで変わった。それならなぜもっと明確な『播磨国風土記』が引用されなかったのか…実はこの風土記は、世上では失われており、江戸時代も後期に、中世の写本がただ一本、三条西家の蔵から発見され寛政八(1796)年にやっと市井に現れたのである。しかしその時には既に人々は、何の説明もなくしかも自然にはありえない構造物に対し、周辺の地形・印象・時代の変化の中での知識・教養などから、それぞれの時代の解釈を伝承として作り上げていたのだ。

その中で、石宝殿の眼下に広がる加古川の町出身の山片蟠桃(1748~1821)は天文・地理・歴史など12巻にのぼる『夢の代』を書いた学者。彼はその文中で「石宝殿縁起を記載しながらも、(..だが石宝殿を見ると、大造りの物だが、上古石棺を造りかけて廃した物か、知るべからず)と記す。彼が地元出身で、合理的な学者のため、周辺に石棺の多いこともあり、こうした理解をしたのであろう。現代的な解釈だったと言えるが、石宝殿は今も神社のご神体である。

私どもは40年も昔に書いた『日本史の謎・石宝殿』で、この石宝殿は、蘇我氏の滅亡期に関わる物か..とやや感傷的な終末としたが、これはまた次回になってしまった。

## 間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業  
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員  
1973~2006年 同上館長  
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講  
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講  
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業  
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)  
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員  
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)  
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授  
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

## Uレーエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 173

## 下津令遺跡 ～山口県防府市

中里 伸明

私が紹介するのは、山口県防府市に所在する下津令遺跡である。下津令遺跡は佐波川右岸の河口付近に立地し、古墳前期から中世末にかけての集落遺跡である。実を言うと私は下津令遺跡にさほど思い入れがあるわけではないのだが、ただ、私が山口県に移り住んでから受けたカルチャーショックが集約されているという点で私にとって大きな意義がある。

位置的に当然のことであるが、山口県は北部九州の文化と瀬戸内の文化の影響をダイレクトに受ける。北部九州文化の影響が強い山口県西部(長門国)と瀬戸内文化の影響が強い山口県東部(周防国)という、わかりやすい構成だ。

下津令遺跡が所在する防府市域はその両文化圏のはざまにあり、文化圏の中心からある意味最も離れた地域であるが、その一方で、両文化圏をつなぐ地域ともいえる。また、古代には国府が置かれ、政治の中心となるとともに港湾都市としての機能も備えるようになる。

下津令遺跡は佐波川を挟んで国府所在地とは対岸にあり、政治あるいは経済の中心地とは決して言い難い。しかし、防府平野の地域的特性の一端を垣間見ることができる。

そのことを示す端的な事例としては、古墳前期に遡る竈付住居が検出されたことがあげられる。下津令遺跡で集落が形成されるのが古墳時代前期からであるから、集落形成当初から個性を発揮しているということになる。

第二に特徴的なのが、やや断続的ながらも、古墳時代前期から中世末にかけての変遷が追えることである。山口県は平野が狭く、集落に適した立地が限られるため、必然的に同じ箇所集落が長期的に形成されるイメージを持っていたが、実際にはそうした事例は少なく、そのうえ大規模面積で調査された事例となると限られてくる。そういった意味で下津令遺跡は県内における希少例である。

さて、私が下津令遺跡の調査に携わったのは、4年間にわたる発掘調査のうち、最後の4年目の調査である。また、担当した調査区の時代も中世後半～末、すなわち、下津令遺跡の最後の時代でもあった。

下津令遺跡の発掘調査は広範囲にわたっているため、計10地区の発掘調査区が設定されているが、このうち、計8地区で中世の遺構・遺物が確認されている。向条谷地区(13世紀以前)→西柿ノ木地区(14世紀前半)→下瑞光寺地区・沖ノ下地区(14世紀後半～16世紀末)というように、立地を変えながら集落が存続する。

とりわけ、下瑞光寺地区・沖ノ下地区に集落が移動してからは立地が固定化し、存続時期が長い、この時期のほとんどは大内氏の時代と重複しており、県内に限れば政治的に安定していたことの証左といえるかもしれない。私が調査を担当したのはまさにこの時期のものである。

遺構の構成としては、掘立柱建物があり、その付近に井戸や大型土坑がつくられる。そしてこれらを取り巻くように溝が配置される。いうまでもなく居住域の様相を示すが、下瑞光寺

地区ではこの居住域に隣接して人が住めない谷地形もあり、ここをゴミ捨て場として利用している。

遺物では、瓦質土器や土師器を主体にしつつ、朝鮮陶器瓶、信楽焼壺、備前壺、象嵌青磁などが少数出土している。

下津令遺跡に限ったことではないが、山口県で中世後半の遺跡の発掘調査をしていると、調査の最初のうちは瓦質土器ばかりが出土し、土師器坏皿がほとんど出土しないという現象に出くわす。そして、「この遺跡では土師器坏皿は使用していない」と思い込み始めた頃に、土師器坏皿が出土し始め、この思い込みが否定される。

調査後に土器の変遷を整理してわかったことだが、14世紀までは土師器坏皿を供膳具として使用しているが、15世紀以降は酒宴等に用いることはあるものの供膳具としての使用はほとんどないようであり、16世紀後半に至っては、供膳具であろうが酒宴用であろうが土師器坏皿の出土は皆無であった。発掘調査時には、新しい時期のものから掘り始めるのが定石であるから、上記のような現象にでくわすのである。

私は山口県に移り住むまでは弥生後期～古代前半の集落遺跡の調査を担当する機会が多く、中世後半の遺跡を担当する機会がほぼ皆無であったから、供膳具としての土器が出土しない状況をまったく想定していなかった。なので、新鮮な気持ちをもったとともに、自分の世界観の狭さを再認識させられた。

自分の世界観の狭さを再認識するたびに、必ず私の頭に浮かんでくる言葉がある。それは、「今ある当たり前を当たり前だと思ふな」である。これは、愛媛大学の田崎先生の言葉である。今回、私はどうやら古代以前のイメージを引きずって、中世後半の世界を見ようとしていたようなのである。

ちなみに、山口県教育委員会が1978年3月に刊行した『下右田遺跡第1・2次調査概報』の巻頭カラーでは、瓦質土器足鍋・焙烙、土師器坏・小皿の集合写真が掲載されているが、これは一括資料ではなく、出土遺物を寄せ集めたものである。つまり、この当時は私と同じようなイメージで中世後半の世界は見られていたということだ。しかも、掲載されている瓦質土器は16世紀代、土師器は13～14世紀代のもので時期が合わない。おそらく、15～16世紀代の土師器がほとんど出土しなかったため、かわりに13～14世紀代の土師器を持ち出したのであろう。

「今ある当たり前を当たり前だと思ふな。」…頭でわかっていても実際には難しい心構えである。下津令遺跡は私にこの言葉の重みを再認識させてくれた。私が経験した中世後半における現象が、言うまでもない当たり前のことなのか、そうでないのかはわからないが、「多様性の肯定」ができなければ、理解できないことがたくさんある。これは遺跡に限ったことではなく、何事にも当てはまる、私にとっての人生訓である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは松下修さんです。

## 考古学者の書棚

## 「入門パブリック・アーケオロジー」

松田陽・岡村勝行／同成社(2012)

渡瀬 健太

学生時代、考古学研究室と運動部の二足の草鞋を履いていた私は、他学部の友人と接する機会が多かった。ある日将来の進路について問われた私は「遺跡の発掘を続けたいからどこかの教育委員会に就職しようと思う。」と答えた。その際返ってきた返事は「公務員が遺跡の発掘するん？正直税金をそんな一部の人がしか興味のないことに使ってほしくないなあ。」であった。それまで私が当たり前のものと思ってきた「文化財は大事、守るべき」という考えは、友人にとっては当然のものなどではなかったのだろう。一種のカルチャーショックを覚えた私に、どうすれば興味をもたない人にも、文化財を守っていくことの意味や価値を理解してもらえるのだろうか、という問いが深く刻み込まれることとなった。このような問題意識をもつ中で、手に取ったのが今回紹介する『入門パブリック・アーケオロジー』である。まずは本書の目次を引用する。

## 序章 パブリック・アーケオロジーの導入に向けて

## 第1部 パブリック・アーケオロジー概論

第1章 世界のなかのパブリック・アーケオロジー  
—その成り立ちと理論—

## 第2章 パブリック・アーケオロジーの論点

## 第3章 日本におけるパブリック・アーケオロジー

## 第2部 パブリック・アーケオロジー関連資料

## 第1章 注目される活動事例

## 第2章 UCL考古学研究所教育プログラム

## 第3章 欧州の考古学者

## 第4章 欧州の遺跡調査体制と近年の動向

第1部ではパブリック・アーケオロジーの枠組みやこれまでの研究について解説し、今後争点となってくるであろうテーマを挙げる。著者は、パブリック・アーケオロジーの手法として、考古学教育を通して知識の伝達を図る「教育的アプローチ」、社会に対して考古学の宣伝・アピールを行い、より多くの社会的・経済的・政治的な支援を得ようとする「広報的アプローチ」、多種多様な過去の解釈の分析・統合を目指す「多義的アプローチ」、考古学と社会政治体制との関係の検証を目指す「批判的アプローチ」の四つを紹介する。さらに著者は「教育的アプローチ」・「広報的アプローチ」を「実践主導現実対応的」、「多義的アプローチ」・「批判的アプローチ」を「理論主導変革志向的」と大別する。「現実対応的」なアプローチについては、我々が普段から行っている発掘現場での現地説明会や展示施設でのギャラリートークなどの活動にも関わってくるものである。しかし、こういった活動は、その前提として現説会場や博物館などこちらの手の届く範囲に来てもらう必要があるという点に限界がある。そもそも興味を持っていない私の友人はこのようなアプローチの網には引っかからない。「国民共有の財産」である文化財

を扱う考古学や文化財行政の責任を果たすためには、歴史や文化財に興味を持たない層にまで手を伸ばしていくことが求められる。そのためには「変革志向的」アプローチを通し、考古学と現代社会の関係を見つめ直すことも必要となる。ここで紹介された四つのアプローチは分けて考えるのではなく、実践→検証→変革→実践と、一つのサイクルとして統合的に捉えることで、「考古学と社会との関係を研究し、その成果に基づいて、両者の関係を実践を通して改善する試み」であるパブリック・アーケオロジーのもつ意味がより鮮明になるのではないかと思う。

第2部では関連資料の提示として、パブリック・アーケオロジー的観点からみて先進的な博物館やケーススタディなど、国内外の事例紹介がなされる。パブリック・アーケオロジーはその定義すら論者によってさまざまであり、研究対象とする範囲も広く、複雑である。また、普段研究しているようにモノがあるわけではないので、取っ掛かりが難しい。そのような時に第2部の「注目される活動事例」やパブリック・アーケオロジーの教育プログラムの紹介は非常に参考になった。本書で取り上げられた活動事例を見ると、日本でのパブリック・アーケオロジー的活動は「実践主導現実的」アプローチが主となっている。一方欧米圏では、発掘調査の際に調査対象の関係者やその子孫への聞き取り調査も併せて行うことで、地域コミュニティと考古学の関係性の再構築やマイノリティの意見を考古学の議論に組み込む取り組みなど、「理論主導変革志向的」アプローチを前面に押し出した活動も行われているようである。日本では文化財とみなされにくい近代以降の「遺跡」を対象とした調査での事例である点や、多民族国家であるという点が日本の現状とは異なっているが、今後は日本でも「考古学調査・研究が生み出す価値の最大化という共通課題」に向けて、「現実的」アプローチと「変革志向的」アプローチを統合的に考えていくことが重要となるだろう。

本書はパブリック・アーケオロジーの研究史や理論を分かりやすく解説してくれ、更に実践例まで提示してくれる、書名の通り、パブリック・アーケオロジーの入門にピッタリの本である。文化財保護法の改正が決まり、これまで以上に文化財の「活用」が叫ばれるようになった現在、考古学と社会の関係性について研究するパブリック・アーケオロジーの視点はますます重要となってくる。行政の中で考古学に携わる者にとって、本書はまさに必携の書と言えるだろう。

## アルカ通信 No.180

発行日 2018年9月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>